

孕み、尙精進の槌竿を加へて進まざるべからず、其時始めて四海歸妙の彼岸に至るべきである。

自殺の可否

小 川 圓 如

凡そ吾人が、貴重なるべき天賦の生命を不自然たる方法によりて亡失する、即ち自殺に就きて、其の可否を議せんとするに當りて、當に二様の批判をかゝるべからず。曰く世間通途の倫理説、曰く佛敎思想殊に本化の眼光に映じたる批判これなり一般的自殺を、左の二項目に別つを至便ならんとす。

一、個人を中心とせる——二、社會を中心とせる

自殺者の心理状態を細判せば、其の種類頗る雑多なるべきも、大体に於て此の二に歸趣せしむるを得べし。

個人を中心とせる自殺に精神的、肉体的と原因に二はあるべきも、要するに受けし身心の病みに

堪へ得ず、遂に現世を厭ひ所謂極樂を夢み、誤れる未來觀に捉はれてなすものなるは、疑の餘地なきところなり、今其一二を例出すべし。

不具者ありて、其の身の不孝を悲みて、遂に此の世を逃れ、以て來世の幸福を計らんとしてあす死あり、また失意に泣くのみならず死等數へ來れば枚擧に遑あらざるべし、此の種は自殺に於て心情は憐れむべきもの多く世人をして同情せしむべきもの尠なからず、然らば斯る死は冷靜なる批判に於て果して是認すべきか。

また社會を中心とせるものに、一二種を擧げんとす。

嘗て、將軍某のなせる自刃は吾人の耳目に新なるどころなり、その理由としては時弊救済にありとか（勿論そは自刃の原因の總てにはあらざるべし）聞くが如くんば、此の種の自殺の如きは、世道人心（人道）の志士、大恩人として、其の死は可とし、徳とすべきか？ また社會と重大ある交渉あるごとき失敗ををし、其責任を免れんとする

即ち悔恨の情止みがたく、社會に對して謝罪せんとする自殺の如き、果して社會の公道即ち倫理上其の責任を解除し、其死を是認し有意義の死たらしむべきや否や。

此の社會を中心とし、個人を中心としたる自殺の孰れを問はず、其の情に於ては憐れむべく悲しむべく、一般人士より同情的弔詞を受くるもの尠なからず、然れども翻て冷靜に考察せば、個人的自殺の如きは自己努力の足らざるもの、勇往邁進の元氣の缺乏、慎重なる思考の能力を缺けるもの等、何れも人生に必須なる者の缺陷其主因をなせるものあり。如何に大なる苦痛と雖も、そは死に勝れるものあるは兒童すら知れり、生は人類否動物の本能也、古より『命有つての物種』とは明かに此の間の消息を語りて餘蘊なきものと謂つべきか。思ふに吾人が身心に打擧を受くることあるはこれ人世の荒浪中寧ろ當然あるのみ、如何なる打擧と雖も死に替ふべき、必死的努力を傾倒せんか、必ずや致命の傷をも轉じて死に勝るの樂を享

受するを得て、人生をして有意義からしむるを得るは數の然らしむるところあり。諺に云はずや「死んで花實が咲くものか」と、然るに其の勇かく意氣かく徒らに將來ある人生を亡ぼし、社會的連鎖によれる共同責任をも果さず、社會を逃れんとするが如きは、倫理說に徴するも毫も、是認し可とすべきものに非るや明なり。

社會を中心とせるもの、第一例の如く、遠大なる理想と、深甚なる氣慨の下になしたるものも、果して幾何の功果をか收め得ん、余は疑はざるを得ず。かくの如き死、遇々社會の耳目を驚かし腐敗せる人心をも一時刺戟せん、されどそが爲めに吾人の内的生活に及ぼさるゝ影響は、蓋し多からざるべしとは、最底智識階級のものも推するに難からざらん。其響くところ案外大なりしとせんも、そは遇發の病的衝動にして、永續して吾人に深刻なる印象を與ふることあるべからず。仮令其功甚だ多く、根本的に時の惡風潮を矯め得たりとせんも、動もすれば無意義なる自殺をもこの美名

に藉口する、低脳者流の模倣心を挑發せざるやの虞なきにあらず、然る恐おしとせんも、自殺せんとすまでの大決心あらんか、寧ろ天壽を全ふし、言ふべきを云ひ、行わんとするところを行ひ、永く混濁せる社會と奮闘せんか、其の功果自殺の比にあらざるべし、故に自殺は利尠なく、害多し。上述の如くなれば、此の種の自殺も亦許すべからざるを知るべく、また二例の如きも『死は罪の賃金あり』てふパウルゼンの説の是認せられ、倫理の定説とあらざる限り容るべきに非らず。彼の如く自己の罪科を償ふことをせず、剩へ死によりて其責域を逃れんとする素より斷じて、許すべきものにあらず、寧ろ大々的に社會制裁を加へざるべからず。翻て思ふに我等の生は、本佛の妙用にして、本有の佛性は修養により其光輝を彌顯はさんとせり。然るに勇猛精進の慨を欠くが故に徒らに本佛の力用を無視し、佛性を失ひ剩へ社會の嘲罵を招くに至るや論なし、かくの如きは我等本化門下の絶對に排斥すべきとす、然れども予は徒

らに、生に執着せよとはあらず、吾人の死すべき時ある事をは、特に闡明せんとす、本化の旗印は不惜生命但惜無上道あり、故に予は爲國爲法てふ、唯一の大道の御爲の死は、是認否讚嘆するところなり。これ法花經的の死にして本佛の妙用に應へ肉に死し、靈に活くる所以ありとす。

茲に於て余は云はん、本化門下は道の爲と云ふ大信念を有し、且つ其自殺は生に勝れるの確証あるにあらざれば、絶對に可とすべき自殺なし。寧ろ無意義に生を捨つるもの、如きは、社會制裁によりて覆轍者流を絶滅せざるべからず、最後に記憶すべきは、『妙とは蘇生の義なり』との一大真理ありとす。——(なほり)——

日常生活と信仰の必要

川 口 智 隨

我々は如何にしたならば、此の一生一年一月乃至日常の生活を、面白く意義ある價值ある生活を